

慶應 SFC 学会

2023 年度研究助成金

(D) 研究調査・フィールドワーク

成果報告書

慶應義塾大学総合政策学部 3 年

72103279 小林りこ

1. 概要

本研究では、ジェンダーやセクシュアリティ、人種、エスニシティ、国籍、障害、宗教などのマイノリティの運動がどのように連帯しうるのかを検討するため、1970 年代日本のフェミニズム運動と障害者運動の調査を行っている。

1970 年代にはウーマン・リブと呼ばれる女性解放運動と、青い芝の会を主とする障害者運動が展開されていた。その過程で、優生保護法の改悪反対の主張をめぐってウーマン・リブと障害者運動の間に摩擦が生じた。優生保護法の改悪に伴う人工妊娠中絶許可要件の変更に対し、ウーマン・リブは「産むか産まないかは女性が決める」と主張したが、障害者運動は胎児に障害があったときに中絶することも女性の自己決定なのかと批判を投げかけたためである。両者は何度も話し合いを重ね、ウーマン・リブは「産める社会を、産みたい社会を」というスローガンに変更した。

2. 目的

研究の目的は、誰も取り残さないインクルーシブなフェミニズムの検討である。フェミニズムは、人種やエスニシティ、国籍、障害、宗教などによる差別の解消と同時に模索される必要がある。なぜなら他の差別との関係性を考えなければ、女性の中のマイノリティ（外国人女性、障害者女性など）が見落とされてしまったり、ある差別の解消のために別の差別構造が維持されてしまったりする可能性があるからだ。

3. 用途

本研究のために重要な資料である以下の二点の印刷費用に充てた。

- ・リブ新宿センター資料保存会 編集『リブ新宿センター資料集成』ビラ篇・パンフレット篇・この道ひとすじ
- ・溝口明代、佐伯洋子、三木草子 編集『資料 日本ウーマン・リブ史』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

4. 研究成果

以下二点の印刷を行ったことで資料の精読が可能になり、重要な記述を拾い上げた

り、時期による変化を捉えたりする作業がしやすくなった。その結果、運動初期は言葉上で「連帯」を目指していたが、実際に障害者運動と出会って摩擦が起き、批判を受けてショックがあったのではないか。この衝撃を受け、障害者との向き合い方に葛藤を経て、運動として戦略の変化があったのではないか、という仮説を立てることができた。

5. 研究成果の活用

今回仮説を立てられたことにより、今後の調査の方向性が見通しやすくなった。印刷した資料の読み込みを続け、仮説を修正しながら調査を継続する。同時に障害者運動に対するリサーチの重要性も明らかになってきたため、精力的に行いたい。そして、最終的にはフェミニズム理論への新たな示唆を行うことを目指したい。